環境情報研究所18周年記念特別企画

中村梧郎写真展：戦争と環境破壊の記憶～ベトナムの生命、わたしたちの未来

（2009年5月25日－30日、稲毛キャンパス新館5階 語学ラウンジにて開催）

■オープニング・パーティ
“ベトナム料理とワインの夕べ”
5／25（月）pm. 5：30 － 6：30
敬愛大学 3701 教室

■講演会（写真の解説と撮影余話）
5／30（土）pm. 1：30 － 3：00
敬愛大学 3303 教室

中村梧郎写真展を終えて

髙　田　洋　子

中村梧郎氏は、ベトナム戦争中の米軍による枯葉剤散布の影響を35年に渡り撮り続けている世界的にも著名なフォトジャーナリストです。2006年にアメリカで開催した枯れ葉剤写真展は高く評価され、2007年マグナム60周年展への参加を要請されました。日本での受賞歴も多数あり、最近では2006年、第1回日本科学技術ジャーナリスト会議（JASTJ）賞を受賞されました。このような中村梧郎氏が、敬愛大学での写真展開催をご快諾下さったことに改めて深く感謝申し上げます。

研究所設立18周年と国際学部稲毛キャンパス移転の年に「真新しい3号館を見応えのあるギャラリーにしたい。」という私たちの夢がこのような形で実現できたのは、本当に嬉しい事でした。写真展の意義を理解し、ご尽力下さった土井学長、中村圭三所長はじめ教職員のみなさん、展示と後かたづけに奮闘してくれた留学生たちにも心からお礼申し上げます。

＊＊＊＊

1963年から1971年までの間にインドシナの空中に大量散布された枯葉剤には、猛毒の高濃度ダイオキシンが含まれていました。枯れ葉剤の影響はベトナムにとどまらずアメリカ、韓国の帰還兵にもみられます。またその子どもたちさえも後遺症に苦しみました。戦争の敵味方に関係なく及んだ悲惨な被害。中村氏の写真群はそれを示す世界に唯一無二の貴重な記録です。化学兵器の恐ろしさ、戦争による環境・人間破壊の真実を伝えることを目的にして写真展を企画しましたが、現地の人びとの悲しみを乗り越える逞しさや、写真家中村梧郎の人としての温かさを感じ取った方も多いでしょう。何といってもそれらの写真のもつインパクトの強さ、メッセージの美しさに誰もが胸を打たれたことと思います。

開催期間中、写真展には多くの市民や学生たちの姿がありました。開催日のオープニング・パーティ、最終日の講演会にも関心をもつ人びとが大

勢集まりました。読売新聞、朝日新聞、千葉日報、毎日新聞の各社は写真付き記事を掲載。また在日ベトナム大使館からは要人が来校し、政府系機関紙ニャンザン（2010. 6. 1）にも写真展の様子が載りました。こうした社会的な反応の大きさには驚くばかりでした。

＊＊＊＊

ラジオ放送の記録

NHK ラジオは、敬愛大学で開かれた写真展での中村梧郎氏のインタビューを、10 数カ国語で国際社会に伝えました(2009 年 6 月 9 日)。以下は、国際放送局平出江美ディレクター制作によるラジオ放送の内容を書き起こしたものです。

枯葉剤散布によって枯死したカマウ岬のマングローブ林と少年の写真――世界的に知られるその写真を撮影した時のこと、ダイオキシンの被害はベトナム人だけでなくアメリカ兵、韓国兵、そのこどもたちにも及んだこと、被害者補償の問題点等について、中村氏が直接に語っています。ここにその貴重な証言を掲載させていただきます。

ー枯葉剤被害を見つめ続けて
フォトジャーナリスト中村梧郎の 35 年ー

（ラジオジャパンフォーカスです。ベトナム戦争中、米軍は大量の枯葉剤を空中散布しました。ジャングルに潜む敵を見つけやすくし、食料を断つことが目的でした。今日は、被害者の姿を終戦直後から追い続けているフォトジャーナリスト中村梧郎さんの活動を紹介します。）

（5 月末、千葉県の敬愛大学で中村梧郎さんの写真展が開かれました。中村さんが、35 年に渡り撮影してきた写真 70 点が展示されました。中村さんの写真は全てモノクロです。枯葉剤被害者と彼らを見守る家族、看護士たちの日常の姿を写し、戦争被害を静かに訴える写真が並んでいます。観客の感想です。）

観客（女性）「障害のあるお子さんへの眼差しがやさしい。撮る人の優しさが出ていると思います」

（写真展には大学で学ぶアジアからの留学生も訪れました。ネパールの学生です。）

留学生（男性）「戦争で多くの人が死んだことは知っていますが、枯葉剤でこんなに被害者がいたなんてしりませんでした」

（中村さんは通信社のカメラマンとしてベトナム戦争を取材。終戦後もベトナムにとどまり枯葉剤の影響について調べました。1976 年、中村さんは、米軍が集中的に枯葉剤を撒いたメコンデルタを訪れ、ベトナム最南端のカマウ岬にあるマングローブの森を目指しました。中村さんはその光景を今でも鮮明に覚えています。）

中村梧郎「ジャングルの中をカヌーで漕いでいくと、突然視界が開けました。全部が死に絶えている枯れ木地帯に出ました。何が変わるかというと、音が聞こえなくなるんです。普通なら森の中では鳥や猿も鳴いていますし、風の音、葉っぱのすれ合う音が聞こえていいるはずです。恐怖が湧いてきました。地元の人に『毒があるから森に入らない方がいい』と言われました。でも、「あそこに子供がいるじゃないか」と振り切って上陸しまし

た。」

＜シャッターの音＞

（その時の写真です。枯れた森の真ん中で、何も知らない少年一人が上半身裸、半ズボン姿で遊んでいます。中村さんは少年にかける言葉が見つかりませんでした。）

中村梧郎「彼は裸足でぴちゃぴちゃ歩いていました。でもその土にはダイオキシンがあるはずなんです。裸足で遊ばない方がいいよと言おうとしましたが、言ってどうするんだと。この南ベトナムで長靴で暮らしなさいと言えるのかと。そんなこと言えやしない。ある種の自分の気持ちの満足だけだと思いました。これが最初の辛さ、苦しさでした。」

（その少年の名前はフンと言いました。その後、名前と写真だけを頼りに、ようやく彼を探し出し再開することが出来たのは、19 年後のことでした。）

＜シャッターの音のあと、音楽＞

（19 年前と同じ場所で、中村さんはフンさんを撮影しました。36 歳になっていたフンさんは、脳性マヒに罹り、妹に支えられ立っているのがやっとでした。その一方で、マングローブの森は、植林によって息を吹き返していました。ダイオキシンがしみこんだ土は雨季の度に、海へと流れ出ていったのです。

何もなかったかのように生き返った森。フンさんの姿だけが枯葉剤の傷跡を見る人に訴えかけてきます。）

（体内のダイオキシンは消えることなく、フンさんの免疫力を弱め、体をむしばみ続けました。歳を追う毎に、フンさんのマヒは悪化。話すことも出来なくなり、腎臓病など様々な内臓疾患にかかりました。昨年暮れ、フンさんは 39 歳の若さでこの世を去りました。中村さんです。）

中村梧郎「彼の全生涯を見守るようなことになってしまって・・・。しかしこれは世界にこの悲惨さを訴える大事な記録です。枯葉剤が撒かれてから、次に生まれてくる子は、隣近所はどうなんだと関心が広がってくる。見なくちゃいかんという思いが出てきて、取材が終わることは無かったのです。」

（アメリカの科学者達の試算によると、米軍は 1961 年から 10 年間にわたって、8000 万リットルあまりの枯葉剤を散布しました。　ベトナム政府によると、枯葉剤を浴びて何らかの病気や障害を持った人は 300 万人います。ベトナム赤十字の報告では、先天的な障害を持って生まれた 15 万人の子供について、両親、もしくは片親が枯葉剤に被曝されたか、汚染された食物、水を摂取していたことがわかっています。そして 3 世代目の人たちにも手足の障害、無眼球症など障害が現れています。）

（枯葉剤の被害は、攻撃する側にあったアメリカや韓国、オーストラリア、またベトナム側についた中国の兵士にも及んでいます。中村さんは、

そうした帰還兵たちも取材しています。その一人が、1982 年に出会った米軍帰還兵のダニエル・ロニーさんです。)

(ダニエルさんは、メコンデルタと同様に、米軍が集中的に枯葉剤を散布した中部高原地帯で作戦にあたりました。川の水を飲み、泥の中で休みました。枯葉剤を撒いた場所は、燃料のような匂いがしたと言います。)

(帰国後、ダニエルさんの両腕は伸びなくなり、皮膚炎など9つの症状に苦しみました。そんな中、娘のジェニファーさんが生まれました。)

<シャッターの音>

(家で無邪気に遊ぶジェニファー、2 歳の時の写真です。しかしその右手は生まれつきありません。ダニエルさん親子と出会い、中村さんはアメリカの人々も同じ苦しみをかかえていると知りました。父、ダニエルさんが亡くなった後も、中村さんはジェニファーさんの良き相談相手として交流を続けています。)

中村梧郎「彼女は、(枯葉剤の被害を受けた) ベトナムを一番理解している人になっていると思います。「ベトナムに行けないにしても私は、アメリカでフィジカルセラピーの資格を取って人々を支える仕事をしたい」と言い出しているのも、彼女の運命と関係していると思います」

(2006 年、中村さんは写真展をアメリカで初めて開きました。ニューヨークの写真展に訪れたアメリカ人の観客からの質問にショックを受けました。)

中村梧郎「「ベトナムの人にも影響が出ているんですか？」という質問があったときは一番驚きました。事実が民衆レベルでは伝わっていません」

(アメリカ人兵士に対し、米国政府は枯葉剤によって引き起こされた病気を認定し、さらにそうした兵士から生まれた障害児に対しても、その治療費を補償しています。

一方、ベトナム人の枯葉剤の被害者は、ベトナム政府から、毎月 10 ドルに満たない支援を受けているだけです。

ベトナム枯葉剤被害者協会は、2004 年に枯葉剤を製造したアメリカの製薬会社 37 社を相手取り、死亡もしくは被害を受けた人への賠償などを求める訴えを起こしました。しかし今年 3 月、アメリカ連邦最高裁は枯葉剤の使用が当時の国際法に違反していなかったことや枯葉剤によってそれらの病気が起きたことを証明できないとして訴えを却下しました。中村さんは大きな矛盾を感じています。)

中村梧郎「補償するのはアメリカ兵だけという実態が世界中に知られれば、「それはないよ」という見解も広がると思います。この問題が構成に救済されるように世界が動いていくことが大事です」

(中村さんの今の目標は、アメリカ全土で写真展を開くことです。中村さんは、自らの写真を通して被害者たちの無念さと平和への願いを伝えて

いきたいと願っています。ラジオジャパンフォーカスでした。）

＊ Agent Orange　米軍が使用した枯葉剤のうち、最も使用量の多かった種類の薬のタンクには、識別用にオレンジ色のラベルが貼られていたことから、ベトナム戦争で使われた枯葉剤の総称として Agent Orange という言葉が使われています。ラジオフォーカスジャパン　2009 年 6 月 9 日（火）放送より

（高田洋子：ベトナム近現代史研究者）